

「はといえば／はというと」はいつ使われるのか

張 明 (川村学園女子大学)

1. はじめに

日本語には多様な提題標識が存在する。「は」はその典型であるが、引用形式を用いた「といえば／というと／といったら」も挙げられる。主題を表す「は」は言うまでもなく、「といえば／というと／といったら」に関しても、岩男 (2016) (2019) をはじめ、多くの研究が行われてきた。さらに、次の (1) のように、両者の合成形式である「はといえば／はというと」も広く用いられている。

- (1) わたしは文科系の科目は好きだし得意なのですが、理科系の科目はというと、全くだめなんです。
(『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型 500』p. 136)

しかし、「はといえば／はというと」を主要な対象とする研究はこれまで見当たらない。文型辞典においても、(1) の出典である『どんな時どう使う 日本語表現文型 500』を除き、ほとんど取り上げられていないのが現状である。「はといえば／はというと」はどのように用いられるのか。単独の「は」や「といえば／というと」が存在するにもかかわらず、合成形式として「はといえば／はというと」が選択される理由は何か。「は」や「といえば／というと」とは異なる特徴を持っているのか。本発表は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所) から収集した実例を用い、「は」「といえば／というと」との比較を通じて、「はといえば／はというと」の使用実態や意味用法を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

管見の限り、「はといえば／はというと」を主たる対象とした研究論文は存在しないが、それに関する記述は岩男 (2016) および日本語記述文法研究会編 (2009) に確認できる。

岩男 (2016) は「といえば／というと／といったら」に関する考察であるが、その中で「はといえば／はというと」について次のように言及している。

- (2) 「というと」「といえば」の2標識は、言語的な先行詞が存在しない限り、名詞句を主題として提示することが不可能であった。そのため、先行詞が存在しない事物を「というと」「といえば」で提示するためには、それを補う必要から言語的な先行詞を必要としない提題助詞「は」を伴った形で用いられるものと考えられるのである。
(岩男 2016 : 197)

「といえば／というと」は主題として提示するために言語的な先行詞を必要とするのに対し、「はといえば／はというと」はそれを必要としないということが (2) から示唆される。果たして「はといえば／はというと」は言語的な先行詞を必要としないのだろうか。この点については4節で検討する。

また、日本語記述文法研究会編 (2009) では、主題を表す「といえば」類の周辺として、「は (どうか) といえば」「は (どうか) というと」が取り上げられ、「あるものを対比的に取り上げるのに用いられる」(p. 249) と指摘されている。『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型 500』においても、「あることを対比的に話題として取り上げる言い方。前の文と対立的なことを言いたいときに使う。」(p. 136) と説明されている。果たして「はといえば／はというと」は「対比」を表しているのだろうか。この点については5節で検討する。

3. 調査資料

本発表は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いて、「はといえば／はというと」の用例を収集し、その使用実態を観察する。そのうえで、意味用法を明らかにする。コーパス検索アプリケーションの「中納言」を使い、BCCWJ(中納言バージョン2.7.0。検索日2023年3月3日)を検索した。短単位検索モードを用い、「キーの条件を指定しない」にチェックを入れ、キーから後方の1語に「語彙素＝「は」」、後方の2語に「語彙素＝“と”」、後方の3語に「語彙素＝“言う”」、後方の4語にそれぞれ「語彙素＝“ば”」「語彙素＝“と”」「語彙素＝“た” AND 発音形出現形＝“タラ”」という条件を指定して検索を行った。その結果、「はといえば」は365例、「はというと」は252例、「はといつたら」は次の1例が得られた。

- (3) 相馬さんと、いっぺんに、こんなことになってしもたんは、元はというたら、安田さんの浮気事件が、あったからで。(PB59_00359 3270 『志織のめざめ』)¹

「はといつたら」は現代語においてほとんど用いられていないため、本発表は「はといえば」365例および「はというと」252例を対象として考察を行う。

4. 言語的な先行詞を必要としないのか

4節では、「はといえば／はというと」が言語的な先行詞を必要とするかどうかについて検討する。本発表は岩男(2016)とは異なり、「はといえば／はというと」も言語的な先行詞を必要とし、この点で「といえば／というと」と共通していると主張する。

岩男(2016)(2019)によれば、提題文の「といえば／というと」は言語的な先行詞が存在しない限り、名詞句を主題として提示することが不可能であるとしている。

- (4) デザインを芸術とする新しい芸術世界を切り開いて、西欧に大きな影響を与えたのがウィリアム・モリスである。モリスといえば、社会主義者の草分けの一人として知られ、中世の手づくりの装飾芸術的な印刷と造本のケルムスコット・プレスや、民衆運動、工芸品の分野の比類ない独創性でも知られているが、本当の意味での影響力の大きさは、カーペットや壁紙のデザインであった。(岩男2019:61)
- (5) 「お前が兄貴分か」「まあ、そうです」「職業は」「無職です」「無職ということはないだろう。何で食っていたのか」「先頃までは白井組の者でしたが、最近脱会しました」「白井組というと、暴力団だな」「まあ、世間ではそう言っとりますが」(岩男2019:62)

(4)(5)に示した用例では、「といえば／というと」の主題名詞句が前文脈に出現しており、言語的な先行詞が存在することが確認できる。このように、既出の表現を指示するという文脈指示的という特徴が見られる。なお、(6)のように、一見すると言語的な先行詞が存在しない例もある。

- (6) 若狭の私の在所は、まだ火葬場がない。人が死ぬと、穴を掘って埋めている。それ故、お葬式といえば、かならず、お巡りさんの監視つきだが、その在所の山を何十本の送電塔が、まるで、銀のフォークを山へさしこんだみたいにつながっていて、足もとは真つ暗なのである。(岩男2019:66)

¹ 先行研究からの引用に関して、下線などはすべて先行研究によるものである。それ以外の下線や囲み線はすべて発表者によるものである。なお、先行研究や用例の引用における句読点は本稿に合わせて「、」「。」に統一している。

主題名詞句「お葬式」が前文脈に出現しておらず、言語的な先行詞が存在しないように見える。岩男（2019：67）は、この場合も「それまでの文脈と関連を持つ語句であり、談話に間接的に導入されている」と述べており、(4) (5) と同様に「といえば／という」は言語的な先行詞を必要とするという考えが一貫して示されている。

一方、2節で見てきた通り、岩男（2016）では「はといえば／はという」は「といえば／という」と異なり、言語的な先行詞が存在しなくても用いられると指摘されている。岩男（2016）で挙げられた用例は次の (7) ～ (10) である。

- (7) セイモウリアは、脊椎動物が両生類から爬虫類に進化したときの、いちばんさいごの両生類だった、というわけです。そのまた、セイモウリアの先祖は、といえば、古生代デボン紀のおわりにいた、「イクチオステガ」（図八十九）という両生類がいられています。
- (8) こうした上級生の活躍によって、とうとう校長が更迭されることになった。私はといえば、上級生の演説によって、前の校長はわるく、自分らは大化の改新のごとき事業を行っていると思**じ**て疑**わ**な**か**った。
- (9) 現在、一般につかわれる「海老」は中国からの借用。蛭の文字は人の苗字として残っている程度である。ところで、全体の国字の数**は**というと、これが百数十もある。
- (10) 旧地主の家の庭先に、麦を収穫して積み上げた麦束の山が火を噴いているのでした。農民達**は**というと、驚いたことに火を囲んで、焼けてポップコーン状になった麦を、手に手に拾い集めて食べているではありませんか。
(岩男 2016：196-197)

これらの用例 (7) ～ (10) の「はといえば／はという」は、果たして言語的な先行詞が存在しないのか。まず、(8) (10) を岩男（2016）の引用箇所をよりさらに前の文脈まで遡って確認する。

- (8) この校長排斥運動は、学生大会などが行われて派手に幕をあげた。しかし、そういう壇上には辻邦生は現われなかった。ところが、辻はまだ二年生であるのに、三年生を主体とした連中から、いわば知恵袋のように思われていたのだ。私もその現場を見たことがある。(中略)。辻はまさに幸村といってもよかった。(中略)。こうした上級生の活躍によって、とうとう校長が更迭されることになった。私はといえば、上級生の演説によって、前の校長はわるく、自分らは大化の改新のごとき事業を行っていると思**じ**て疑**わ**な**か**った。
- (10) 赴任して以来、麦作の重要性を農民に説き、焦熱の劣悪な条件の下で労働意欲の乏しい人達を説得したりして、やっと収穫した穀物でした。(中略)。農民達**は**というと、驚いたことに火を囲んで、焼けてポップコーン状になった麦を、手に手に拾い集めて食べているではありませんか。

確認した結果、「はといえば／はという」の主題名詞句が前文脈に出現していることがわかる。また、(8) (10) に共通する特徴として、主題名詞句と同一語形で前文脈に出現している点である。このようなタイプを本発表では「同形」タイプと名付ける。

次に、(7) (9) の用例について検討する。(7) (9) の主題名詞句である「セイモウリアの先祖」「国字の数」は、確かにそのままの語形で前文脈に現れていない。しかし、(7) の前文脈に「セイモウリア」という表現が確認できる。(9) も遡って確認すると、次の (9) に示すように、「国字」という表現が確認される。

- (9) 腰の曲がった老人と虫（この場合、甲羅をつけたもの）の意味をあらわす「蛭」は国字。現在、一般につかわれる「海老」は中国からの借用。蛭の文字は人の苗字として残っている程度である。ところで、全体の国字の数はというと、これが百数十もある。

前文脈に「X」という表現が出現し、その後文脈に「Xの～」の形として「はといえば／はという」との主題名詞句に用いられる。「の～」が「X」の一側面を表すため、このようなタイプを本発表では「側面」タイプと名付ける。前文脈の表現「X」を参照することから、既出の表現を指示していると十分に言える。

岩男（2016）では挙げられていないものの、実はもう1つのタイプが存在する。

- (11) 革新派は、侵略戦争の尖兵だった日本の兵士の死者を「汚れた死者」として嫌っているからだ。他方、保守派はといえば、「二千万のアジアの死者」を顧みず、日本の兵士の死者を靖国神社に「英霊」として祀るという「虚妄」に陥っている。

(LBn3_00173 4320 『戦後責任論』)

- (12) 約1兆円の有償資金協力のうち、実は、財投の部分は七千億円ほどです。では、残りの三千億円はというと、これは、日本政府からの「出資金」、要するに「タダで税金をあげている」形になってます。

(PM11_00378 17870 『現代』2001年10月号)

- (13) 木曜日ということで本来はチラシ配りもあるんですが・・・。雨がひどい為明日に延期。ずぶ濡れになって風邪でもひいたら余計たちが悪くなってしまうからね。店長は午前中から店長会議の為不在。自分はというと朝一点検来店のお客さんを対応。その後健康診断がありました。

(OY01_01385 1180 Yahoo!ブログ)

(11)～(13)の主題名詞句である「保守派」「三千億円」「自分」は、前文脈を遡っても、「同形」タイプのように、同一語形の先行詞は確認されなければ、「側面」タイプのように、「Xの～」の「X」に相当する部分も確認されない。しかし、(11)の前文脈に「革新派」が出現しており、集合の中に「保守派」の存在も容易に想定できる。(12)も同様に、「約1兆円」「七千億円」が出現していることから、集合の中に「三千億円」の存在が明らかである。(13)は出典がブログであることから、集合の中に書き手である「自分」が含まれることも容易に理解できる。つまり、主題名詞句は前文脈に直接出現しないものの、「それまでの文脈と関連を持つ語句であり、談話に間接的に導入されている」(岩男2019:67)と解釈でき、「といえば／はという」と同様の特徴が見られる。このように、集合の中の一部を指示するタイプとして、本発表では「一部」タイプと名付ける。

BCCWJの実例を精査した結果、すべての「はといえば／はという」が「同形」「側面」「一部」タイプのいずれかに分類できる。その分類結果を表1に示す。

表1 「はといえば／はという」の主題名詞句のタイプ

	「同形」タイプ	「側面」タイプ	「一部」タイプ	合計
「 <u>は</u> といえ <u>ば</u> 」	146 (40.0%)	172 (47.5%) ²	47 (12.9%)	365
「 <u>は</u> という」と	86 (34.1%)	80 (31.7%)	86 (34.1%)	252

² 「はといえば」の「側面」タイプが多い理由は、「元はといえば」「もとはといえば」が合わせて119例あるからである。「はという」と「元」「もと」が前接するのは1例のみである。

このように、「はといえば／はというと」は、文脈に既出の表現を指示する文脈指示的な特徴を持つ。また、岩男（2019）において「はといえば／というと」にも同様の特徴が指摘されていることから、既出の表現を指示するという点で両者は共通すると言える。

5. 「対比」を表しているのか

5節では、「はといえば／はというと」の意味用法を考察し、その意味を捉えるには「対比」だけでは不十分であることを指摘したうえで、その表現が何を表すのかについて検討する。

前述したように、日本語記述文法研究会編（2009）は、次の用例（14）（15）を挙げ、「あるものを対比的に取り上げるのに用いられる」（p. 249）と述べている。

（14）兄は本の虫で、暇さえあれば本に読みふけっている。弟ははといえば、本になど見向きもしないでスポーツに熱中している。

（15）江戸時代の人、少ない資源でも有効に活用してそれなりに充実した生活を送っていた。現代人ははというと、便利すぎる生活に慣れきって、資源の供給が追いつかない有様だ。

（日本語記述文法研究会編 2009：249-250）

確かに、（14）（15）のような用例は「対比」として解釈可能であり、BCCWJからも同様の用例が確認できる。しかし、「対比」として捉えがたい用例も少なくない。

（16）十月にはいって八日目のこと、李績、辛讜、李延枢、宗緑雲、それに徐珍の五人が旅装をととのえ、通化門を出て東へ向かった。馬は李績を選んだ。自分と辛讜のためには悍馬を、李延枢と宗緑雲のためにはおとなしい馬を選んだのである。徐珍はというと、辛讜たちが揚州からつれてきた驢に騎っている。
（LBj9_00102 2710『絳繡城綺譚』）

（17）「想像を絶する幻の宮殿」「洞窟や、塔や、庭園や、城や、美術館や、彫刻」「原初の時代の古い建築」—ノートの中に記されているのは、こうした言葉だけだ。洞窟に関しては、現在の宮殿には、オートリーヴの守護聖人である聖アメデの洞窟、（中略）。塔なら、まさに林立している。（中略）。庭園はと言うと、いちじくや、アロエや、椰子や、サボテンなど石の樹々の繁るテラスは、まさに屋上庭園だ。（PB15_00384 10650『郵便配達夫シュヴァルの理想宮』）

（16）（17）は（14）（15）と比べると、「対比」の意味が薄れており、単に前出したものを「列挙」して、それらの状況や特徴を説明している。さらに、次の（18）の「業績」、（19）の「内容」はそれぞれの先行詞の一側面であり、その側面について説明しているに過ぎない。このような用例は、「対比」として理解することが困難であると考えられる。

（18）調書を読みながら、僕はこの仙台ワンアイホテルの全体的なことを調べた。このホテルが開業したのは十一年前。…（中略）このホテルの土地はもともと伊達通信工業のなじみの取引先が持っていた土地で、…（中略）ホテルの業績のほうははというとバブル崩壊以降の不景気で客数の減少はどうにもならず、数年前から徐々に悪化。

（LBs9_00164 3110『女子大生会計士の事件簿』）

（19）その中でも初期に属すサイレント作品に、『可愛いリリー』（千九百二十七年）がある。リオ・デ・ジャネイロに生まれ、フランス、イギリス、さらには生国ブラジルで旺盛な活動を展開

した、これまた越境する映画人と呼ぶにふさわしい人物、アルベルト・カヴァルカンティの初期作品だ。(中略)。さて、『可愛いリリー』の内容はと言えば、ミシン工場の女工がせっかく素敵な恋を掴みかけるものの、昔の男がひどく嫉妬し刃物を振りかざして追いかけてきて…といった一幕をコミカルに描く、キュートな珍品にすぎない。

(PB17_00053 3900 『ジャン・ルノワール越境する映画』)

では、「はといえば／はという」とを捉えるには「対比」では不十分であるとすれば、いったい何を表しているのか。「はといえば／はという」の用例には次の共通点が見られる。主題名詞句およびそれ以外の名詞句が前文脈に提示され、後文脈ではまず主題名詞句でないものについて述べ、その後に主題名詞句に切り替えそれについて述べる、という構造である。例えば、(17) では「洞窟や、塔や、庭園」が前文脈に提示され、後文脈でまず「洞窟」「塔」といった主題名詞句でないものについて述べ、その後に主題名詞句の「庭園」に切り替えて述べている。(18) も同様に、前文脈に「ホテルの全体」が提示され、後文脈でまず「開業」「土地」といった主題名詞句でないものについて述べた後、主題名詞句の「業績」に切り替えて述べている。

一方、上記の構造は「といえば／という」には見られない特徴である。

(20) この本がでる頃は、西条の大好きな季節、夏が来ているわけで。夏というと、甲子園ですよ。もちろん、西条は、甲子園が大好きです。(岩男 2019 : 62)

(20) では、先行詞である「夏」のみが前文脈に提示され、後文脈で「という」を用いて主題名詞句「夏」について述べる。つまり、先行詞の「夏」と主題名詞句「夏」の間にそれ以外の事柄が現れず、名詞句の切り替えや取り立てる事柄の転換は見られない。図 1 に示すように、これは「はといえば／はという」との明確な相違点であると考えられる。

「はといえば／はという」：主題名詞句およびそれ以外の名詞句	→	それ以外の名詞句	→	主題名詞句
用例 (17)：「洞窟や、塔や、庭園」	→	「洞窟」→「塔」	→	「庭園」
「といえば／という」：主題名詞句	→	主題名詞句		
用例 (20)：「夏」	→	「夏」		

図 1 「はといえば／はという」と「といえば／という」の違い

このように、「はといえば／はという」は対比ではなく、既出主題名詞句の再提示を表す表現であり、主題名詞句でないものから主題名詞句に切り替え、既出の主題名詞句を再提示し再び焦点を当てる際に用いられる。興味深いことに、(9) (11) (12) (19) の囲み線で示した接続表現も、この結論を支持している。「はといえば／はという」と共起する接続表現をまとめると、次頁の表 2 のようになる。

表 2 からわかるように、「一方」「それに対して」といった対比を表すものや、「さて」「では」ところで」といった話題転換を表すものが比較的用例数が多い。「しかし」「だが」といった逆接を表すものや、「そして」「で」といった添加を表すものも数多く確認される。これらの接続表現は一見すると意味が異なるように見えるが、ほとんどが対象の切り替え時に一般的に用いられるものである。「はといえば／はという」は既出主題名詞句の再提示を表す表現であるため、表 2 に示した接続表現と高頻度で共起することが理解できる。

表2 「はといえば／はという」と共起する接続表現

「はといえば」	用例数	「はという」	用例数
「一方・他方」	18	「さて・さて一方・さて最後に」	21
「そして」	12	「では・じゃ」	15
「さて」	11	「一方」	14
「しかし・しかしながら」	6	「そして・そうして」	10
「だが」「では・それでは」	4	「ところで」	6
「しかも」「ところが」「で・それで」	3	「対して・これに対して・それに対して」	5
「ところで」「例えば」	2	「で」	4
「そのうえ」「それでも」「それに反して」「対する」「反対に」「片や」「だから」「おまけに」「最後に」「でも」「次に」「それゆえ」	1	「しかし・しかしながら」	3
		「が」「次に」	2
		「けれども」「ただ」「もっとも」「にもかかわらず」「その反面」「それに引き換え」「ちなみに」「そこで」「まず」「また」「例えば」「さらに」	1
合計	80	合計	94

6. 「は」は物足りないのか

6節では、「は」との違いを検討し、先に示した「はといえば／はという」の意味用法の妥当性を確認するとともに、その表現効果を明らかにする。

これまで挙げてきた「はといえば／はという」の用例は「は」に置き換え可能な統語構造を示す用例が多い。しかし、(21)のように、「は」に置き換えにくい統語構造を示す用例もある。では、なぜ(21)では「はといえば／はという」を用いることができるのか。

- (21) 発売当初、香りでダイエットできるなら使ってみたいという人が多く、大変な反響を呼びました。…(中略)。しかし、肝心のダイエット効果はというと、その製品を使って劇的にやせたという話は聞いたことがなく、香りを嗅いだり、皮膚から成分を浸透させるだけでは、みろみる脂肪を燃やすという“奇跡”は起きないのが現実です。

(LBs4_00060 2520 『お医者さんも知らない健康の知恵300』)

「は」は一般的に格成分など文の一部を主題化するマーカーである。(21)を「ダイエット効果は」に置き換えると、統語的に不自然な破格の文になってしまう。一方、「はといえば／はという」を後接させて節レベルにすると、(21)のような統語構造も可能になる。さらに、「はといえば／はという」は格成分を要求せず、単に主題名詞句に切り替え、既出の主題名詞句を再提示し再び焦点を当てるマーカーである。この意味的特徴もまた、(21)のような統語構造を自然なものとする根拠の一つとなり得る。

また、「は」と比べると「はといえば／はという」の用例数は少なく、使用頻度が圧倒的に低い。その理由として、以下のことが考えられる。「はといえば／はという」を用いることで、文脈に応じた内容の区切りや取り立てる事柄の切り替えが強調され、前文脈とは異なる事柄に対して注目を促すという表現効果がある。そのため、既出の名詞句を列挙して述べる場合、「はといえば／はという」は基本的に最後の名詞句を主題名詞句として提示する。

- (22) 羊市場には異様な殺気がただよっているという。買うほうは、よい羊を求めての品定めに余念がないし、売るほうは必死でお客をつかもうとする。袖を引っぱって自分の羊を売り込む。羊はというと、自分たちがなんのために連れてこられたのか、うすうす悟っているようすで、落ち着きがない。
(LBa3_00028 11970 『住んでみたサウジアラビア』)

「羊市場」に「買う」人、「売る」人、「羊」の存在が想定される。「買うほう」「売るほう」には「は」が後接する。一方、最後の名詞句である「羊」には「は」ではなく「はというと」が用いられる。文脈に応じた内容の区切りや取り立てる事柄の切り替えが強調され、前文脈とは異なる事柄に対して注目を促すという表現効果がある。そのため、「はといえば／はというと」は最後の名詞句に用いられると考えられる。前掲の(16)(17)が最後の名詞句の「徐珍」「庭園」に「はといえば／はというと」を用いるのも同様の理由である。このような特別な表現効果により、「はといえば／はというと」は頻繁に使われる表現ではなく、最後の名詞句に後接して用いられると考える。

7. まとめと今後の課題

本発表は「はといえば／はというと」はどのような場面で用いられ、どのような意味用法を表すのか、また「は」や「といえば／というと」とは異なる特徴を持っているのか、という問いを立て、「はといえば／はというと」の使用実態や意味用法を明らかにすることを目的とした。結論は以下の3つである。第一に、「はといえば／はというと」は言語的な先行詞を必要とし、前文脈に既出の表現を指示する。この点は「といえば／というと」と共通している。第二に、「はといえば／はというと」は既出主題名詞句の再提示を表す表現であり、主題名詞句でない名詞句から主題名詞句に切り替え、主題名詞句を再提示し再び焦点を当てる文脈で用いられる。この点は「といえば／というと」との相違点であり、「は」に置き換えにくい統語構造を自然なものとする根拠の一つでもある。第三に、「はといえば／はというと」は取り立てる事柄の切り替えを強調し、前文脈とは異なる事柄に注目を促すという表現効果がある。これは「は」より使用頻度が低い理由であると考えられる。

今後の課題として、まず「はといったら」が現代日本語でほとんど用いられない理由を明らかにする必要がある。「といったら」が持つ評価的意味を手がかりとして検討していく。また、「は、といえば／は、というと」「はどうかといえば／はどうかというと」といった形態的バリエーションが示す意味についても、用例収集の範囲を拡大して検討を行う。さらに、本発表は「はといえば／はというと」を区別せずに論じたが、両者の間に意味・用法上の違いが存在するかどうか、主題名詞句やレジスターを中心に検討することも今後の課題である。

参考文献

- 岩男考哲 (2016) 「引用形式を用いた提題文の主題名詞句と叙述の類型」 福田嘉一郎・建石始 (編) 『名詞類の文法』 pp. 185-202. くろしお出版
岩男考哲 (2019) 『引用形式を含む文の諸相—叙述類型論に基づきながら—』 くろしお出版
友松悦子・宮本淳・和栗雅子 (2010) 『改訂版 どんな時どう使う日本語表現文型500』 アルク
日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法5 第9部とりたて 第10部主題』 くろしお出版

調査資料

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) . 国立国語研究所. <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>